

国語研の窓

20号

平成16年7月1日 第20号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会

〒115-8620 東京都北区西が丘 3-9-14

電話 03-3900-3111 FAX 03-3906-3530

URL <http://www.kokken.go.jp/>



昭和37年4月～昭和51年11月：旧西が丘庁舎

もくじ

- 暮らしに生きることば 1
- 研究室から：「日本語の現在」をとらえる調査研究 2
- 国際シンポジウム報告 4
- 『現代日本の異体字』『日本語ブックレット2002』 5
- ことばQ & A 6
- 表紙のことば 6, 7
- 移転のお知らせ 7
- 新刊 7
- お知らせ：「ことば」フォーラム 8

暮らしに 生きる ことば

親ことば

前号(19号)のこのコーナーでは、コミュニケーションの方略が年齢とともに発達することの紹介がありました。言葉の発達・習得は、成人になるまでの期間が何と言っても一番大きいようです。

それと比べると習得の勢いは弱くなるかもしれませんが、私たちは成人になってからも、いろいろと言葉を身につけていきます。会社に入ればその業界や職場の言葉を覚えなければなりません。社会状況が変化すれば新しい言葉も生まれ、それを習得する必要も出てきます。男性について言えば中高年になって自然に使える言葉もあるようで、「暑いですなぁ」の「～ですなぁ」などがそのひとつです。

そのようなことに興味を持ちながら、日々日本語を観察しているのですが、自分自身の言葉をふり返ったとき、自分が親になってから使い始めた言葉がいくつあることに気づきました。

例えば「これ、おいしいから食べてごらん」の

「～てごらん」のような言い方です。親になる前はこのような言い方をすることはなく、家族や友達に対してであれば「食べてみたら」でした。親になって初めて、自分の子供に対して使った言い方です。

同じような言い方を探してみると、「早く顔を洗っておいで」のような「～ておいで」や、「早く食べなさい」のような「～なさい」が見つかりました。「～ておいで」との関連で言えば、「こっちに来い!」という意味の「おいで!」などもそうです。いずれも親になってから使い始めた言い方で、それ以前だと、「洗ってきて」とか「早く食べろよ」などでした。

「～てごらん」「～ておいで」「～なさい」と並べ、これらに対応する「～て見ろ」「～て来い」「～しろ」と比べてみると、問題の表現にはどうやら〈丁寧な物言い〉という共通点があるようです。自分の子供に丁寧な物言いをするというのは、考えてみれば不思議なことですが、親としての尊厳を無意識のうちに示そうとしているのかもしれません。

(尾崎 喜光)

「日本語の現在」をとらえる調査研究

国立国語研究所では、昨年度（平成15年度）より新たな研究課題として、『日本語の現在』をとらえる調査研究（以下「日本語の現在」と略称）を開始しました。ここでは、この企画の概要とこの1年間の成果の一部を簡単に紹介することにします。

●なぜ「日本語の現在」なのか

現代日本語について多角的な調査研究を進めることは、国立国語研究所の中心的な仕事の一つです。これまでも、書き言葉、話し言葉を問わず、幅広い領域の課題について調査研究を実施し、数多くの成果を公表してきました。しかし、今回改めて「日本語の現在」というテーマを掲げたことには、大きく三つの理由があります。

①緊急性の高い国語施策上の問題の解決に資するために、日本語の現在の状況を的確に把握する必要がある。

研究所は、2年前の平成14年8月に「外来語」委員会を設置し、これまでに2回の『「外来語」言い換え提案』を行ってきました（本紙14号、16号、18号に関連記事を掲載しています）。この委員会の活動を通じて改めて痛感させられたのは、議論を確実かつ健全に展開するためには、外来語の現在の状況に関して「科学的な調査データに基づく信頼度の高い知見が不可欠」ということでした。

②急速に変化する現代社会の言語問題に対応するために、最新の情報に基づいて議論する必要がある。研究所の従来の調査研究は、研究への着手から結

果の公表までにかかなりの年月を要するものが多く、信頼度の高い基礎データとしては満足できるものであっても、公表の時点では情報自体がどうしても古くなりがちでした。「日本語の現在」は、できる限りの「最新情報」を、「速報性」を重視して報告・提供することを目指しています。

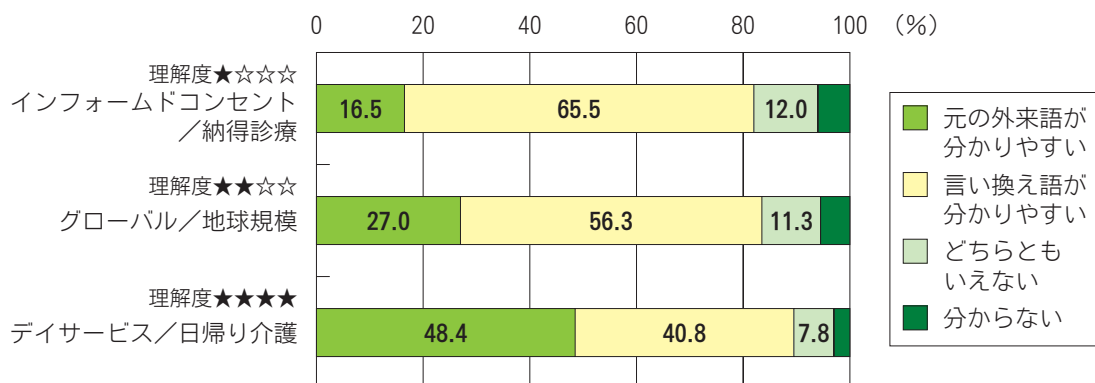
③以上の二点に関連して、総合的な観点から、大規模かつ将来に向けて継続性のある調査研究を設計する必要がある。

過去の言語データを検証しながら、これまでの動向を探るタイプの研究ももちろん必要ですが、これに加えて、現在まさに変化しつつある日本語の生の姿をとらえることが、社会的にも学術的にも強く要請されているのです。

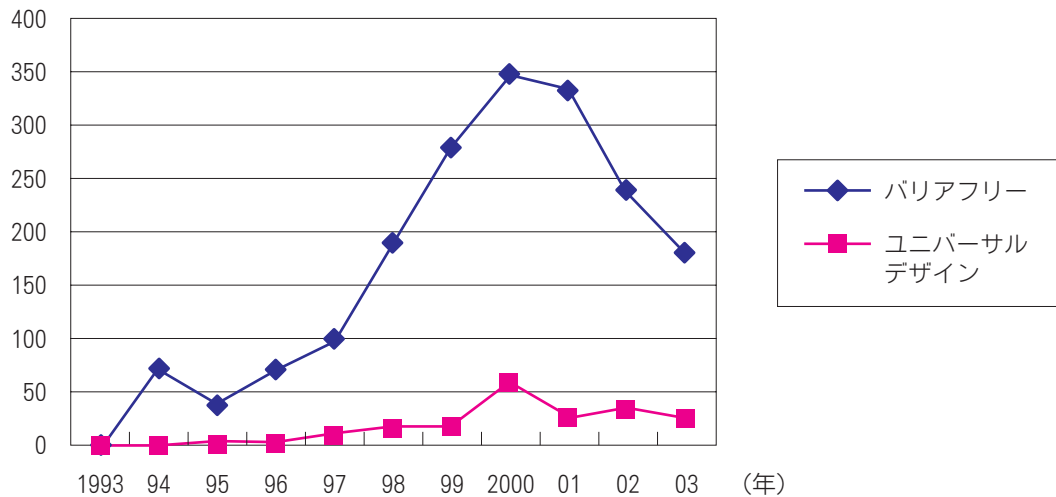
●どんな調査研究を行っているか

調査は対象によって、大きく二つに分かれます。一つは、言葉に関する国民の意識を様々な側面から探る「意識調査」、もう一つは、日本語の実際の在り方を様々な媒体について探る「実態調査」です。意識調査の対象は日本語の使い手である国民各層、一方、実態調査の対象は実際に使われている日本語そのものということになります。

すでに触れたように、現在国立国語研究所では、『「外来語」言い換え提案』を行っています。これは、分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫についての提案です。そこで、平成15年度は、まず外来語を中心とした言葉遣いを取り上げ、



「言い換え語」の分かりやすさ



『毎日新聞』年次別出現頻度

3種類の意識調査を優先的に実施しました。それぞれの内容は、次の通りです。

- ①全国調査（国民を母集団とする世論調査型の調査）。対象者は4,500人（15歳以上男女），調査項目は約50項目，調査方法は個別面接法。
- ②自治体調査（自治体を対象とする情報の発信者側の意識調査）。対象自治体は全国680市区町村，対象者は自治体首長，広報紙責任者，ホームページ責任者，一般職員，調査方法は郵送法。
- ③外来語定着度調査（「外来語」委員会の言い換え提案のための定着度調査）。対象者は2,000人（16歳以上男女），調査項目は外来語計75語，調査方法は個別面接法。

①の全国調査は『外来語に関する意識調査』として、また、②の自治体調査は『行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査』として、速報版の報告書にまとめました。③の外来語定着度調査の結果は、「外来語」委員会の審議に直ちに生かされています。

一方、実態調査では、最新の白書（32種）や最近の新聞（主として1990年代から現在まで）等に使われている大量の外来語について、使用頻度、使用される分野や文脈などの情報を整理して、「外来語」委員会に提供しています。また、作成した大量の電子化資料を活用して、外来語の受容過程に関する研究なども行っています。

●成果の一部を紹介すれば

前ページのグラフは、「外来語」委員会が提案した「言い換え語」と「元の外来語」とで、どちらが

分かりやすいかを広く国民に尋ねたものです（意識調査の中の「全国調査」より抜粋）。

取り上げた3語のうち、国民の理解度が25%未満と最も低かった「インフォームドコンセント」については、言い換え語の「納得診療」の方を分かりやすいとする回答が圧倒的多数を占めました。また、理解度が25%以上50%未満だった「グローバル」についても、言い換え語の「地球規模」の方を分かりやすいとする回答が過半数を占めています。一方、理解度がすでに75%を超えていた「デイサービス」については、言い換え語の「日帰り介護」よりも、元の外来語の方を分かりやすいとする回答が、若干多いという結果になりました。

このような調査結果は、委員会が提案した個々の言い換え語が、どの程度まで有効であるのかを確認するための貴重な資料となります。

次に、上に掲げたグラフは、過去10年間に『毎日新聞』に現れた外来語の頻度を、年次別に示したものです（実態調査のデータにより作成）。「バリアフリー」も「ユニバーサルデザイン」も、福祉の分野で新しく登場してきた重要語ですが、このグラフを見れば、この2語がそれぞれ「いつごろ、どのくらい話題になっているか」が一目で分かります。まさに、変化の真ただ中にある外来語の、生きた姿をとらえていることになるわけです。

このような個々の外来語の使用実態についての最新情報も、「外来語」言い換え提案の本文の記述に十分に反映されています。

（相澤 正夫）

第11回「世界の〈外来語〉の諸相」

— 標準化・活性化を目指す言語政策の多様性 —

平成15年度の国際シンポジウムは、「外来語」をテーマにして、平成16年3月21日、23日、24日の3日間にわたって開きました。これまでは異なるテーマの会合を別々に開くこともあった国際シンポジウムですが、今回は「外来語」を焦点として多面的な議論ができる機会とすることを目指しました。

学会、新聞社、放送機関、出版社からの協賛や後援を頂いたり、交通の便の良い都心（有楽町）のよみうりホールと朝日スクエアを会場に選んだりして開催したところ、幅広い方面からのべ448人の方が参加・来聴してくださいました。

●外来語というもの

世界には、従来なかった新しい事物や概念、考え方を表現するために、主な言語（公用語・国語）の中へ別の言語から言語表現を借用・導入する言語社会が数多くあります。日本もその一つです。

外来語は、新しい概念などを社会にもたらし、技術・学術・経済等の専門領域だけでなく一般の日常生活を豊かにする可能性を持っています。それと同時に、外来語になじみの薄い人にとっては意思や情報が伝わりにくくなるおそれもあるものです。

外来語の持つこの両面をめぐって、それぞれの言語社会では多様な工夫や言語政策が行われています。一方には、言語を活性化する外来語を積極的に取り入れるための工夫があり、他方には、意思の疎通を円滑にするために似た意味を表す新しい表現を自らの言語で作るなどの工夫があります。

●会の目的と内容

今回のシンポジウムでは、こうした外来語への対応を行っている国々から研究者や言語政策担当者を

招いて、それぞれの外来語の実情や対応の現状についての講演や討論をお願いしました。これを通して、それぞれの言語社会の抱える外来語を中心とした言語問題への理解を深め、各言語社会における今後の課題や活動の方向について互いに改めて考える機会を得たいと考えたわけです。

会には海外6か国、韓国・中国・ベトナム・英国・アイスランド・タンザニアから言語研究者・言語政策担当者をお招きし、国語研究所員を含めた日本の研究者も加わって、全部で22件の講演・発表とそれに基づく討論や意見交換を行いました。

お呼びした国は限られた数ですが、それぞれの外来語事情は様々です。日本と同様にかつて漢字や漢語を受け入れた韓国・ベトナム、漢字の源となった国で今も漢字の意味や音を駆使して外来語に対応している中国、旧植民宗主国の言語から現地言語への切替え政策を続けているタンザニア、近隣の強大言語圏の中であって多言語教育政策と並行させながら自国語の保全を強力に推進し続けるアイスランド、複数の民族語が接触した結果生まれた言語（ピジン・クレオール）が生きているパプアニューギニアなどです。

会の名称（副題）の通り、外来語・借用語の多様な姿や様々な課題が具体的に紹介され、これに対する言語政策の在り方について最新の情報が交換されました。この中には、これまで我が国では触れることの困難だった事実も多く含まれていて、講演者や来聴者の皆さんからは、貴重な機会であったというお声を頂きました。

このシンポジウムでの講演や議論の内容は、16年度中に報告書にまとめて公刊する予定です。

（杉戸 清樹）



国立国語研究所プロジェクト選書 2 『現代日本の異体字』—漢字環境学序説—

笹原宏之，横山詔一，エリック・ロング 編／税込み 2,730円 A5 320ページ 2003年11月 三省堂



文字には、同じ字であってもその形（字体）に揺れが見られることがあります。特に漢字に顕著で、例えば学校で教わる「国」という字には、「國」や「圀」、さらに「口」などの形も見受けられます。この「國」に手偏のついた「𨾏」にも、「𨾏」のような字の形が現れ

ています。こうした異なる字体をもつ漢字をそれぞれ「異体字」と呼びます。ほかにも、「区」「區」，「鷗」「鷗」などを目にすることがあるでしょう。

これらの異体字が、どこでどのくらい使われているのかという実態については、書籍、雑誌などを除き、ほとんど明らかになっていませんでした。そこで、本書では新聞、百科事典のほか、地名が書かれた資料を対象として取り上げ、大規模な調査を通じ

て、その使い分けの傾向などの実態を把握しました。

また、そうした複数の異体字の中から、どれかを選択する際の人間の意識つまり「漢字心理」について、認知科学の方法による調査を紹介し、簡潔かつ分かりやすく解き明かします。本書は、日本語学、漢字研究と認知心理学という各面から、漢字の使用とその背後にある意識、それらと相互にかかわっている施策を、「漢字環境」としてとらえました。

さらに、使い方に難しい面のある字体・字形・書体、正字・俗字・略字や、常用漢字、印刷標準字体、JIS 漢字、人名用漢字などの用語とその内容についても、それらの中国や日本での歴史を含め、具体的に解説しています。

巻末には、現在行われている異体字を集めた一覧表が付いています。これは、本文に出てくる異体字の索引も兼ねたものです。この索引から、何か特定の漢字を選び出して、本文を拾い読みしていくことも可能です。異体字の動態と人間の意識と国の決まりとの相互の関連を多角的に理解する一つのきっかけになるかもしれません。

日本語ブックレット2002

このブックレットは、平成14年（2002年）の日本語に関する動向や資料を分かりやすい形で広く提供することを目指して作成したものです。第1部では、図書、雑誌、新聞記事等の資料に見られる動向の概観をまとめました。第2部では、「ことばに関する本」についての新聞記事、一般向けの刊行図書、総合雑誌等の目録を掲載しました。

国立国語研究所では、日本語研究に関する網羅的な文献目録等を掲載した『国語年鑑』を昭和29年（1954年）より毎年刊行しており、既刊は50冊になります。また、国民の言語生活に関する情報として、新聞記事の収集を昭和24年（1949年）以降継続して行っており、その成果の一部である記事見出しデータベースはインターネット上に公開しています。

これらは基礎的な研究情報として役立つものですが、これら以外にも、日本語の姿が現れている資料があります。例えば、刊行物では一般雑誌、総合雑誌、PR誌、一般向けの日本語に関する本、言葉に関するハウツーものなどがありますし、また、刊

行物以外でも日本語情報関連のホームページも含め、内容、形態等様々な資料があります。

これらを踏まえ、本研究所における日本語に関する情報収集体制の向上を目指した新たな試みとして、このブックレットを作成しました。

新たな取組であり、手探りの部分も多いところですが、ひとつの形にまとめることにより、御批判を受け、よりよいものを目指して改良を重ねていきたいと考えています。

広く多くの方に御利用いただくために、PDFによる電子版として、国立国語研究所のホームページよりインターネット上に公開しています（<http://www.kokken.go.jp/katsudo/kanko/nihongo-bt>）。

日本語は、私たちの生活にとってなくてはならない身近なものです。このブックレットが日本語に関する情報源の一つとして、成長し、言語生活に役立つものとなることを願っています。皆様の御意見をお待ちしています。

ことばQ&A

質問 方言が少なくなっているように感じますが、将来は完全になくなってしまおうのでしょうか？

回答 国立国語研究所が山形県鶴岡市で過去3回にわたって行ってきた共通語化に関する調査結果を見てみましょう。図は、31の単語について発音してもらった結果を指標化し、年齢別に示したものです（得点が高いほど共通語化が進んでいます）。約40年間で発音についての共通語化がどの年代でも進んでいることが分かります。特に若い人たちの間では1991年調査の段階でほとんどの単語が共通語の発音になっています。アクセントや語彙などについても共通語化が進んでいることが報告されています。

一方で、人々は場面によってことばを使い分けます。家族や友人などと話す場面と見ず知らずの人と話す場面ではおのずとことば遣いが違ってきます。別の調査結果では、地域社会においては、親しい人と話す時は親しくない人と話す時に比べて、方言で話す比率が高くなる傾向があると報告されています。

これらのことから、次のように言えるのではないのでしょうか。共通語化は確かに進んでいます。特に若い人たちの間ではその傾向は大きいです。しかし、一方で地域社会の人たちは話し相手に応じて共通語と

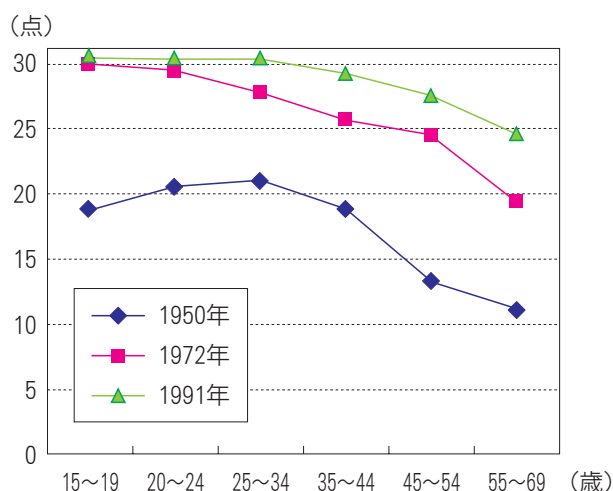


図 音声の共通語化（鶴岡調査）

方言を使い分けています（若い世代に現在でも新しい方言が生まれているという研究報告もあります）。

日本国中どこへ行っても共通語を話せる人が多くなりましたが、それは共通語だけを使う社会になるということではなく、場面によって方言と共通語を使い分ける社会が今後も続くことを意味しているのではないのでしょうか。私たちが生きている間に方言がなくなることは考えにくいと思います。

（米田 正人）

表紙のことば

国立国語研究所は、昭和23年12月20日の創立以来、何度か移転・改築を重ねてきました。設立後十数年間は、他機関所有の建物（の一部）を借用して仕事をしていましたが、昭和37年3月、千代田区神田一ツ橋から北区稲付西山町（現在の北区西が丘）へ移転し、初めて自前の建物で研究を行えるようになりました。

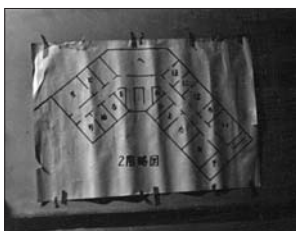


引っ越し前日（昭和37年3月30日）

北区にある移転先（旧陸軍兵器補給廠）を訪れ、机や棚などの配置を確認。

「く」の字形の建物で、廊下の両側に部屋が並んでいます。「2階略図」では、いろは順に「そ」まで記号が付けられています。内部の壁には進駐軍の落書きが残されていて、消すのに苦労したそうです。

「にっき」には「てんきがあまりよくない」とあります。



引っ越し当日（3月31日）

一ツ橋庁舎から荷物を搬出。

「にっき」によれば、ここは書庫の跡です。

◇ 国立国語研究所は立川市に移転します ◇

国立国語研究所は、昭和63年7月19日、「多極分散型国土形成促進法に基づく国の行政機関等の移転に関する閣議決定」によって移転対象機関となり、平成元年8月24日、移転候補地が立川市に決定しました。

既に平成13年度から着手した建築工事は現在、順調に進んでおり、今年の10月末に建物完成予定です。工事完成・引渡し後、土地建物の現物出資を受け、

平成17年1月末までに移転を行い、同年2月から立川新庁舎での事業開始を目指しています。

— 移転情報 —

移 転 場 所：東京都立川市緑町3591-2
敷 地 面 積：23,980 m²
延べ床面積：14,537 m²



(正 面)



(中 庭)

新 刊

『日本語科学 15』

2004年4月／国書刊行会／B5判横組み144ページ／税込3,150円

その引っ越し前後の様子を写真でたどってみましょう。

* 写真の一部は、故・林 ^{はやし}大先生（元所長、当時・第一研究部長）がまとめられた「ひっこしにっき」から拝借しました。

（池田 理恵子）



引っ越し当日（続き）

きちんと整理され、運び出されるのを待つ机や資料。中央に見える扇風機の形が時代を感じさせます。



玄関の上に「国立国語研究所」の文字が見えます。小説「砂の器」に登場した、濠端 ^{ほりばた}の庁舎ともこれでお別れ。



明かりがともる新庁舎

引っ越しは夜遅くまで続き、所員たちは夜食を食べて、片付けに追われたようです。



4月4日

引っ越しの片付けも一段落。中庭に机を並べ、桜の下で、お祝いをしました。

第21回「ことば」フォーラムのお知らせ

テーマ：「こんにちは“コッケン”です。—みなさんの質問から—」

日 時：2004年7月17日(土) 13:00～15:00 (開場 12:30)
会 場：東松山市南地区市民活動センター内 高坂公民館視聴覚ホール
後 援：東松山市教育委員会 協 力：高坂公民館
定 員：194名 (当日先着順)

◆内 容：埼玉県東松山市高坂地区にお住まいの方々、中学校、高等学校の生徒さんには、アンケート型質問表にあらかじめ記入をお願いします。その内容をきっかけに、日常の日本語の問題を一緒に考えましょう。

◆発表者：小椋 秀樹・尾崎 喜光・山田 貞雄

◆お問い合わせ先：独立行政法人 国立国語研究所 電話：03-3900-3111(代) FAX：03-3906-3530(代)
電子メール：forum@kokken.go.jp

第22回「ことば」フォーラムのお知らせ

テーマ：現代の外来語

新しい言葉が、英語などからの外来語として、大量にまた急速な勢いで、日本語に入ってきています。外来語は、うまく取り込むことができれば、日本語を豊かにしてくれます。しかし、取り入れ方を間違えると、コミュニケーションを阻害することもあります。

国立国語研究所では、「外来語」委員会を設置し、分かりにくい外来語について、分かりやすくするための具体的な方策を提案しています。このフォーラムでは、「外来語」委員会の活動を紹介するとともに、日本語と英語の専門家をお招きして、日本語・英語双方の視点から外来語の問題を見つめることを通して、現代人として外来語にどのように対応していけばよいのか、議論を深めていきます。

日 時：2004年8月28日(土) 14:00～16:30
会 場：東京ウィメンズプラザ(東京都渋谷区神宮前)

◆プログラム

○分かりにくい外来語

田中 牧郎(国立国語研究所員、「外来語」委員会委員)

○暮らしの中の外来語

佐竹 秀雄(武庫川女子大学教授、言語文化研究所長)

○コミュニケーションの観点から見た外来語

鳥飼 玖美子(立教大学教授、「外来語」委員会委員)

◆申込み方法

氏名・連絡先(電話番号・FAX番号・電子メールアドレス)を明記の上、郵便・FAX・電子メールのいずれかで、下記あてにお申し込みください。

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14

国立国語研究所

第22回「ことば」フォーラム係

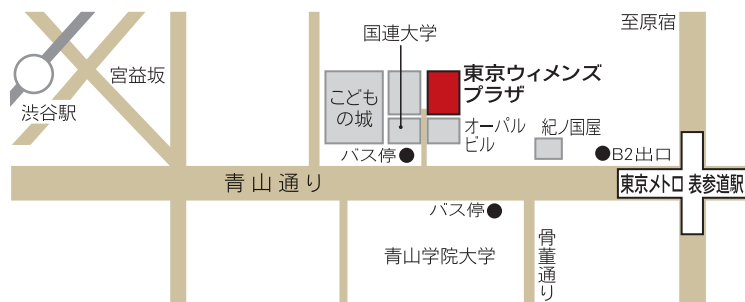
電話・FAX：03-5993-7663

電子メール：forum@kokken.go.jp

交通のご案内

JR山手線・東急東横線・京王井の頭線
渋谷駅下車徒歩12分

東京メトロ 銀座線・半蔵門線・千代田線
表参道駅下車徒歩7分



詳しくは、国立国語研究所のホームページ (<http://www.kokken.go.jp>), ポスター, チラシを御覧ください。

「フォーラム」とは「広場」という意味の外来語ですが、国語研究所では参加者の方々と一緒に言葉について考えたり話し合ったりする機会を「ことばフォーラム」と名づけて、開催しています。